



明治四年 上京する三井家首脳一行と三野村利左衛門

口絵写真 上京する三井家首脳一行と三野村利左衛門（三井文庫所蔵）

明治四年六月、大蔵省から「新貨幣為替方」の御用を命じられたことは、明治期の三井の発展のうえで画期的な意味を持つ。新貨幣為替方とは、新貨条例の公布による新貨幣の発行にともない新旧貨幣の交換と造幣地金の回収を取扱うものであったが、同時にこの新貨幣為替方は、当時の大蔵省首脳部の構想によれば、新たにわが国に移植されるべき銀行制度の中心に位置する銀行に発展することが期待されていた。三井では、ただちに東京、大阪、京都、横浜、神戸など枢要の地に「為換座」を新設して、新貨幣の交換事務を開始するとともに、呉服店の分離、両替店・御用所の合併、東京大元方の創設など三井家内外の改革に着手した（詳しくは本誌第三号所収岩崎論文参照）。これら一連の改革を実施するにあたって、三井八郎（右衛門（高福）、三井三郎助（高喜）、三井次郎右衛門（高朗）、三井篤二郎（高潔）ら三井家の大元方役同苗は、明治四年一〇月二三日京都を立、東海道を陸路東京に向った。一行は翌月一五日に東京に到着しているが、この写真は一行の横浜逗留中、出迎えた三野村利左衛門らとの記念写真である。これは能勢丑三氏所蔵の原画を昭和六年三井家同族会京都出張所が複写したもので、写真の台紙に付された説明はつきのおりである。

前列右より

三井篤二郎、三井次郎右衛門、三井八郎右衛門、三井三郎助、三野村利左衛門

後列右より

吉田佐兵衛、森川小三郎、吉岡吉太郎、今井友五郎、近藤軌四郎、斎藤純蔵、能勢規十郎、  
斎藤銀蔵、僕 吉五郎、野依周吉郎、僕 作介、長田參次郎、才領嘉介